

東野芳明のデュシャン／中原佑介のデュシャン

平芳 幸浩（京都工芸繊維大学）

本発表は、雑誌『美術史』第177冊に掲載された論文「戦前期日本におけるマルセル・デュシャン受容について」の延長線上に位置する研究であり、第二次世界大戦終結後の1950年代から1970年代前半までの日本におけるマルセル・デュシャン受容の在り方を再検討することを目的としている。

この時期のデュシャン受容を巡る言説の中心をなしていたのは美術評論家の東野芳明だと目されている。東野は1964年から『美術手帖』誌上において《グリーン・ボックス》のメモを読解する連載を始め（六回で中断）、1972年には同誌上で「デュシャン透視考」という連載を始めた。この「デュシャン透視考」が元となって美術出版社より『マルセル・デュシャン』が出版されたのが1977年である。デュシャンの作品を包括的に論じた大著という点では、現在でも日本人が著した唯一無二の著作であるこの書物によって、東野によるデュシャンが戦後日本のデュシャン像を決定付けた感否めない。今も折に触れ再生産されるデュシャン像は、この枠組みを脱してはいないようである。

それゆえ本発表においては、このような東野によるデュシャン受容の相対化が試みられる。そのために行われる操作は大きく二つ。一つは、東野がデュシャンについて言及したテキストを、彼の批評活動の変遷の中に再配置することである。つまり、1958年の最初のヨーロッパとアメリカ渡航に始まり、60年代における数度の渡米で見聞する同時代の欧米の美術動向、そしてそれと並行して出現した日本の「反芸術」的動向を捉える東野の視線の移り変わりとの関係の中で、彼のデュシャン論を読み直すこと。それによって、東野個人のなかにおいてデュシャン理解がどのように変化していったかが明らかとなるであろう。もう一つは、東野のデュシャン論を同時代の他のデュシャン論と比較検討することである。本発表では、東野と同じく重要なデュシャン論を展開しながら、その部分はあまり顧みられてこなかった中原佑介の論を主な比較対象とする。なぜなら、東野と同世代の美術批評家である中原は、1962年の『ナンセンスの美学』、1975年の『大発明物語』においてなど、様々な形でデュシャンについて言及しており、デュシャン論者として決して東野に引けを取っていないからである。中原のテキストとの比較によって、東野のデュシャン理解が当時の批評状況とどのような関係を結んでいたかが明らかとなるであろう。

以上のような操作を行うことで、東野のデュシャン理解の在り方を通時的共時的関係性の中に再配置することが可能となり、これまで絶対視されてきた東野のデュシャン論を相対化しつつ、戦後日本におけるデュシャン受容のあり方を広い視野で捉え直す契機を作り出すことが可能であると考えている。